がんば

島三小育友会報
発行
広報部
特別号

50回発行記念特集号

「がんば」の編集
和やかな広報部の…ある日…

ごあいさつ

育友会長　本田武彦

三小育友会広報紙〔がんば〕は、ここに輝く発刊五十号を迎えました。

今や名実共に島原市唯一の権威ある育友会広報紙として、会員はもとより校区外にも多くの読者を擁し、日進月歩の躍進を重ねてまいりました。

これもひとえに、歴代会長さんを初め先輩諸兄の御指導の賜と深く感謝申し上げる次第であります。

しかしながら、創刊当時相当の苦労があったと聞いております。苦難を切り拓き、一時の盛衰はありましたでしょうが、今日「がんば」健在なりと聞く時、歴代会長さんをはじめ先輩諸賢の偉大さを深く感じ、涙のにじむのを覚えます。ひと口に五十号といいましても、実に十七年の才月が流れています。その時の六年生が今や三十才の働き盛りとして、又育友会員として活躍しております。

さらにまた、目出たい事は続くもので、来年は育友会が創立三十年を迎えます。育友会の前身であります父兄会より通算しますと、実に五十年になります。

その間、幾多の変遷を経て、今日に至っておりますが、現在、広報部は有馬部長を中心に、優秀なスタッフをそろえており、今後益々紙面の充実刷新を図り、三小育友会のよりよき羅針盤となって、本会の動向を正確に把握し、公正に報道し、育友会広報紙たるの使命達成に挺身し、以って先輩を初め会員皆様の御要望にお応えする覚悟であります。

ここに発刊五十号を迎え、その記念事業として特集号を発行いたしましたところ、各方面より励しの言葉を賜り感謝感激の極みであります。

今後一層の御声援を賜りますよう、お願い申し上げます。

〝がんばの卵〟

谷光風

三小育友会の会報が「がんば」になったのは山本篤五郎さんが会長になった頃だったように記憶していますが、私が会報の編集をやっていたのはその山本さんがP・T・Aにはいりたての頃で昭和三十年から四十年頃にかけてですから、今の育友会のお母さんが小学生か幼稚園だったわけですね。

いま考えると、PとTとの話合いが一番よく行なわれた頃だったように思えますし、天皇陛下がご巡視にこられるし、理科教育で表彰されたり、毎月のように寄付金集めにまわったり、その他もろもろでとにかく忙がしたったもんです。三小は歴史が古く、父母の会の歴史も古いので昔からいろいろと組織的な活動があったのですが、何しろ敗戦ご破算で、P・T・Aなどという外国語名の組織作りをやったわけですから、先生も父母も暗中模索の試行錯誤で、会報も中断に近い情況だったようです。そこで皆さんと話合って班別の専門部を作り「会報班」というのができまして、私がその係りをさせられました。

今もそうかもしれませんが、原稿が集まらないのには困りました。

いろいろと考えまして、研修旅行も参加者を目的別のグループに分け、各グループにレポートを出させたり、運動会でも何でも行事があれば各係員には必ず意見や感想の報告文を出させたりして、ずいぶん皆さんから嫌われました。

回を重ねること50号
三小育友会の歩み〝紙面に躍動〟

文章を書くのは皆の前で歌うのより嫌だから参加しないなどといわれまして、何か悪いことをしているような気分になったりしたもんです。

そのまた原稿の編集がコッケイで、会報班の先生やお父さんに集ってもらって夜やるのですが、皆さん仕事で疲れている上のことなどで元気づけにチビチビやりながら編集しようというわけですが、チビチビの方が次第に忙がしくなって、そのうちに原稿の文字がモウロウとなるので、これはまた明日やりましょうということにして、あとは夜半すぎまで教育論議を展開する。そのときの話の方が原稿の内容よりうんと良かったりして大分勉強になりました。

やはり、ああいうことは、自分の勉強だと思わないと続かないようです。

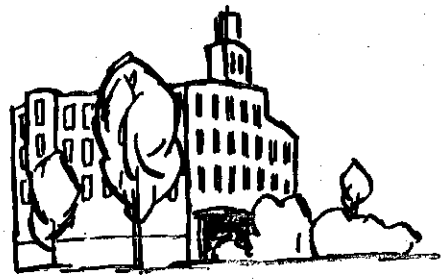
つまらない話で恐縮ですが、これは「がんば」以前の〝卵〟時代〟の思い出話です。

立派な会員の皆さんのご努力で、育友会も、会報も、ますますご発展で何よりです。

今後のご健斗を心よりお祈りいたします。

以上

（元育友会副会長）



がんばの誕生

―本田巻男―　（元育友会長）

「がんば」が創刊されて五十回を迎えたとのことで、手許に残っている資料をひっぱりだしてみました。

三小の育友会に会報が生れたのは、私の前会長藤田実さん（昭和三十七・八年度、文筆家で俳人としても有名な藤田チェリー豆総本店社長）が大変な熱意とお骨おりで、昭和三十七年七月「三小育友会報第一号」が出されたのが始まりでした。それから学期毎に一回発行され、昭和四十年三月第九号迄続いたようです。

私が会長をおおせつかったのは、昭和三十九年四月でしたが「がんば」はその翌年、副会長谷光風さん、教養部長山本蔦五郎さん、教養部のなかに会報班があり、責任者が山本悌一郎さんであった時、会報名を皆なに親しまれる呼び名にしようと会員から会報名を募集しました。なんと二四八通もの応募があり、その中には「白山」「しらぬひ」「まゆやま」「あけぼの」等々があって慎重審査の上、最後に残った数通を無記名投票で選ばれたのが「がんば」でした。

名付親は同じ会報班で活躍された明月堂の田口勝さんで、二四八通のうちただ一通よせられたものが当選したわけです。

三小は市内で最も海に近く漁業の多い地域であり、その特性からも、又島原の名物料理の代表格であるところから三小育友会報に一番ふさわしく親しみ深い名称だと今もって感じいっています。

「がんば」は島原における「ふぐ」の通称で島原独特の料理法で食べるその味はまことにすばらしいのですが、猛毒のあるところから、語源は「がん」（棺桶）をそばにおいてでも喰わずにおれないと言ったことから「がんば」になったのではとも言われています。

会報の題字は、大相撲の番付にみられる特有の力強い書体ですが、正真正銘の時津風部屋所属の行司式守伊三郎さんの書かれたもので、これも会報班の小鉢京さんのご好意で手に入れることができたものです。

「がんば」が創刊されて十年余りが経ち、五十回を迎えたことは私にとって感無量のものがあります。

三小育友会の歴史と発展に大きな足跡を残し、今後ますます「がんば」の腹がふくれるよう祈っています。

（新山町　永瀬屋書店）

がんばの名付け

田口勝（元育友会報班員）

朝夕はめっきり涼しくなり初秋を感じる頃となりました。

会報班の皆様、毎日御苦労様です。私も十二年前、短い期間でしたが、会報班に所属し、当時の苦労や楽しみ等をつくづく感じとっています。

先般、育友会広報部員の山口様が御来訪され、会報「がんば」の発刊五十回記念特集号として、アンケートを取った結果がんばの由来、その当時の模様を鮮明に知り度いとの希望が非常に多いので、ぜひ名付け親として会報に寄稿してくれとのお願いで、私も困却しておりましたが「がんば」の会報がいつ迄でも残る以上は、私にもくわしくお知らせする義務があると思い、たっての御依頼ですので十二年前を回顧し当時の資料を元に原稿に取りかかりましたが、何分無学文盲でとても多くの育友会の皆様方の御期待に添い得るか心配です。

さて、会報がんばの前の会報は島三小育友会報として九号まで発刊された様に記憶しています。これでは余り寂しいので会報名を付けたらどうかと多くの方の意見で、当時の育友会長藤田実さんの頃賞品付きの募集がありましたがまだ皆さんに徹底していなかった関係か応募者がなく、其の後本田巻男会長さんの時代に本格的に募集され応募総数二四八通　はまゆう・あけぼの・不知火・眉山・白山・汐騒・がんば等、一番多く寄せられたのは①白山、②しらぬ火、③まゆやまの順でした。

此の中より十二名の審査員にて慎重に選定した結果「がんば」五票、「はまゆう」四票「あけぼの」三票という大接戦の末「がんば」に決定した訳です。これも三度四度に渡って無記名投票の結果、やっときまった訳です。

次は題字の事に行当りどの様な字体が良いか、ああでもないこれでも駄目と、そこは名編集長の山本悌一郎さんの事それなら勘亭流が良い、どっしりして風格があるとの事それなら今大相撲が福岡でやっているから知人に書いて貰らって来ると、いとも簡単に引受けられたのが小鉢京さんでした。私等もびっくり　余り心安く引受けられたのでどうなるものかと仲ば心配でしたが、二・三日後出来たぞと持参されたのが見事な相撲字体の勘亭流、訳を聞くと立行司の式守伊三郎さんと親友との事、ほんとうに驚きました。この書体を会報「がんば」三号から使わせてもらっているわけです。この字体も「がんば」と共に、永久に残してもらい度いものです。

編集に当っては、当時の予算も少なく、八千円か一万円足らずだったと思います。その関係で紙質も悪く、節約上多くを掲載されず、山本悌一郎名編集長も大分困っておられたようです。

でも編集に当っては、和気あいあい山本部長のリードのもとに、よくもまあ気心の知れた者ばかり集まったものでし…夜おそくまで頑張ったものです。

当時の事を回想しますと、あれからもう五十回も発刊されたものかと、今さら年月の過ぎるのを疑いたくなります。

紙面の都合も有る事と思いますのでこれにてペンを止めます。

皆様方の御健康をお祈り致し、発刊五十回を心から御喜び致します。

最後に当時の会報班のメンバーを念の為記しておきます。

会報班長　山本悌一郎さん・加藤勝彦先生・谷口三矢先生・草野洋子先生・田中十郎さん・小鉢京さん・加藤一美さん・本田幸男さん・緒方喜十さん・坪田勘次郎さん・遠武照子さん・田口勝

がんばの書体

津町　小鉢　京

もう何年前になるだろうか、良くもない頭をたたきながら思い出すままに、書いてみました。

三小育友会の会報班に指名され、そのメンバーに、頭の切れの良さで評判の草野、谷口両先生、それに悌一郎君や田口さんというベテランの各氏の顔を見て「これはうかつに出来んぞ」と思ったものでした。

「会員の方々に親しまれる会報の在り方、その為にはどんな会報を」と皆が議論を交わし、三小の保育室を根城に夢中になったものでした。

ノートと鉛筆を持って会員の方達の意見を求めに走り廻ったりもしました。会員の方達から募集した会報の名前の選定にはいづれおとらぬ、立派な名前ばかりで、決定に苦労しましたが「味のある会報」という事で田口さんの「がんば」と決定したのは、夜もおそく雨のひどい夜だったようです。

「がんば」の題字の書体を悌一郎君が色々考えて、相撲の番付の字体にしたいとの事で誰か書ける人はいないだろうかという話が出て、私が引受けて、丁度、福岡場所が行われている時でしたので、すぐに福岡に行き、知人の式守伊三郎行司に頼んだ所、本場中に拘ず、そんな事情なら…と書いて頂き、それが題字となり、校長室に保管してある色紙を見るたびに懐しい思いです。全てが出来上った時は夜の十二時を過ぎて、三小から広馬場に出た時は、ひっそりして月がきれいな夜で、田口さんの家に行き、カステラをごちそうになったのもなっかしい想い出です。

最近、育友会の在り方について色々と批評がありますが、やはり誰かがやらなければならない事ですし、役についた人達は大変な事ですけど、第三者から見れば所謂バカになってでもやって行く人がなければ出来ない事もあります。これからも会報「がんば」が大いに腹をふくらまし、舌つづみをうてる味のある「がんば」に育っていくことを祈って想い出を終ります。

（小鉢茶舗店主）

コオロギ

松本　巌（元三小校長）

職退いて五年
こほろぎ鳴きそめし

いつもはしのびやかにやってくる秋が、今年は、はっきり足音をたててやってくるような気がします。

職を退いて五年、気ままでささやかな暮しの私にコオロギが鳴きはじめました。コオロギはコロコロと鳴いているようにも聞こえます。そしてあのコロコロのことを思い出します。

昭和二十七年でしたか、二学期がはじまって恒例の「砂運び」がありました。砂場に入れる砂を全校児童が南風楼下の海岸から運んでくるわけです。ついでに故　林田先生がアサリ貝を掘ってきました。風が吹いては飲み雨が降っては飲みたい時代でしたから、アサリ貝をサカナにして一杯やろうということになって、十四、五名の勇士が宿直室（今の女子更衣室）にたむろしました。火鉢の金網に貝をのせると間もなく焼けて開きます。うまいうまいと食うほどに、飲むほどに気分のボリュームが、ぐんぐん上って、いつしか教育談義・人生談義が沸いてきました。もう、とっくにアサリ貝はありません。上田先生が、どこからか、どろまみれのショウガを持ってきました。むしって、しょう油をつけて酒のサカナです。今井先生が、塩カラを買ってきました。手の甲が小皿がわりです。夜は、だんだんふけていきます。ショウガも塩カラもなくなりました。

その時です。一匹のコオロギがとんできました。私がとらえて火鉢で焼いて「秋には秋のサカナあり」と酔句を唱えますと一同感激して、池田岩永・下田先生などでしたか私は頭　僕は羽根　おれは足と、食ってしまいました。そしてカラカラと秋の夜の高い笑い声がおこりました。もうサカナは何もありません。

ところが、またサカナが見っかりました。誰でしたかね「ここにも秋のサカナあり」と畳のささくれを引きちぎってしょう油をつけて食べました。おれも、われもと畳をむしりました。

あの狭い宿直室ではあったが、どれだけの酒のこぼれを吸いこんでいることであろうか。

しかし、子どもらのため、教育のため、イデオロギーをこえ私情をおさえて、たのしく飲み語りあい、時に野蛮なようなたあいもないしぐさの中に銀河のような白い清らなものがただよい、たくましく大きな教育の原動力が生み出されたことは事実です。

ああ、なつかしい宿直室。あんな時がまたくるのだろうか。コオロギはコヨコヨと鳴いているようでもあり、いや今にきっとクルクルと鳴いているようにも聞えるのです。

あの時のコオロギの
めい福を祈りながら

全力投球

小沢ユキエ
（元広報部副部長）

「終わり」いや「終り」
「食る」いや「食べる」
「送くる」いや「送る」
というような、初歩的な送りがな、又漢字では「掃」を「掃」「捜」を「捜」「徳」を「徳」というように、辞典片手に取組んでいる真剣な顔々。これは「がんば」編集時の様子です。

二十数年らい辞典など手にした事もなかった。五十年度広報部員の面々。果して私達にこの役が勤まるのかどうか不安は募るばかりでした。

でも与えられた部には全力を尽さなければならない。幸にして情障学級の小峰忠与士先生が子供心理学を熱心に研究なさっていられる関係で、あらゆる角度からのアドバイスが大いに実をむすんだこと大野部長さんの多忙な体で、何回となく部会を開いて下さったこと等とても私達部員にとっては活動しやすい状態のもとで、末熟ながらも全力投球が出来たのと思います。

育友会員を引退した今でも、現広報部長　有馬さんのご厚意で「がんば」を愛読させて戴いておりますが、誌を重ねる度に進歩の道を辿っているようです。

ましてや最後の五十号「遊びと友達」という特集は、広報部員の方々の心憎いまでの考案が発揮されていると思いました。

この乱塾時代で親子共々下校を待ちうけての塾だ、学習だと、身心共に葛藤窮まりない毎日の中に、ひと滴の潤いをみたような気がしました。

発足して以来十数年の歴史を刻み込まれた「がんば」の為、広報部の皆様の今後の製作に拍手を送ると共に、大なる活動を期待してやみません。

人生には良い友達程師に勝るものは無いと言いますが、「五十年度がんば会」なるものを結成し、現在でも、なお年に三回程席を設けて旧知を温め、昔に変らない議論の中より新鮮な知識、賢さを、盗み取るように努力しております。

「がんば」の発展を祈って

宮副智子
（元広報部副部長）

○○校の会長さんが、「わが校の○○○は、一流人が作ってるから、良かろうが…」と言われたとき、すかさず、「三小のがんばは、部員全員で一生懸命に作った、内容の充実したものですよ。読んでみなさったら…」と自信をもって返事が出来る程、「がんば」は、すばらしい広報紙です。

二年間に亘って、三小の広報部に在籍させていただき、すばらしき友と良い思い出を残させていただきました。

暗くて、ガラーンとした校舎の中で、小峰先生、大野部長、有馬、小沢両先輩、他の部員の方々と熱意に燃えて、活発な意見のかわしあいを、夜の十～十一時項までしたり、校正をしたり…にすっかり魅せられて、二年目は希望して広報部に入れていただきましたほどです。

でも、つらい事もありました。原稿をお願みしても引受けていただけない時などは、もうすっかり予定はついているのに、さて誰にお願いしようかと頭を痛めたり、また小さい子供を家に残して、夜遅くまで度々出かけなければならなかったりしたことなど、たくさんありもしました。

時間的余裕のある時は、小峰先生に情操教育を教わったり、子供のしつけに関した本を貸していただき、わが家の子供の事などを部員の方々にお話しして、良い知恵を授ったり、二年間心強い毎日が過せたものです。

他校にまいりまして、予算の相違に驚きました。同じ部数の発行なのに「がんば」は五～七万円も少いのです。

「もう少し予算が欲しい、もう少しあれば、こんな企画が出来るのに…」と話し合ったことが思い出されました。

がんばが出来上った頃だなあ…と思ったら、がまん出来ず「もう出来た？見せて」と現部員のお友達に電話をかけて読ませていただきます。

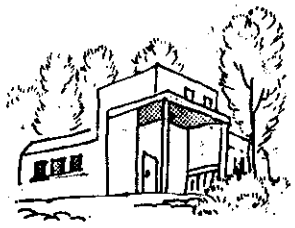
五十二年度第一号も子供の遊びについてのテーマ、とっても良い出来ばえ。あちらのより、ずっとすばらしい内容でした。

育友会の皆様、原稿書きに協力してやって下さい。そうして、がんばをお読みになったら意見、批評を広報部にしてやって下さい。

皆様の協力で、ますます、すばらしい、がんばにして上げて下さい。お願いいたします。

広報部の部員の方々も、そのファイトをいつまでも燃しつづけて下さい。他校へまいりましても、がんばを楽しみにお待ちしてますので、

三小広報紙がんばの発展をお祈りしつつ、おわらせていただきます。



「がんば」十数年の歩み

広報部長　有馬隆子

島三小育友会報誌「がんば」も発行回数五十回を重ね諸先輩方に「卵」、「誕生」、「命名」「書体」その他について述べていただきました。いま、第一号から紐解いてみますと、その時代時代の校内外の移り変りがよくわかり、また素晴らしい名文句や文章がひしめき合っている感じがします。

誕生以来十数年にもなる現在では、社会情勢も変り、ひと昔前の出来事と遠くに考えられるものもありますが、中には今もなお続いて、その当時より盛んになっているものもあるなど、さまざまであることを感じます。

そこで一号より順を追って少しながめてみましょう。

昭和四十年七月十五日「がんば」と名付けられての第一号。当時の松本厳校長先生の「タッチ・イクオール・ラブ」と言う名文があります。「親しく、具体的に触れ合うことから、愛情が湧いて来る。政治も、恋愛も、万引も、タッチからである。握れば欲しくなる。買わないものには手を触れてはいけない。見れば欲しくなり、さわれば一層欲しくなる。タッチ＝ラブを教育的に人生的に善[illegible]たいものである。」と言う一節があります。現在言われるところの「スキン・シップ」のはしりかと思われます。

二号には学校参観について取り上げ、各方面からの意見等をまとめ、結果として日曜参観の希望大となり、次号三号では、その様子、感想、アンケート結果など、PとTのガッチリ組んだ様子が詳しく報じてあります。またこの号には、「母校愛、太平洋を越えて―　上田金作さんへの手紙…」と題して、皆様ご存知と思いますが、アメリカより母校へ、何回となく愛の贈り物を続けながら異国の地で帰らぬ人となられた「上田さん」へ、山本悌一郎さんが書かれたお手紙があります。

見事な勘亭流の直筆
毫の揮毫式守伊三郎氏

四号頃より「家庭会議を開きましょう」という提唱が何度となくなされています。

四十一年七月には、県PTA表彰に輝やいたこと。「町内育友会運営上の諸問題」と題して懇談会の模様。「気楽で楽しい会に……有馬舟津町育友会…」「よい子は仲よしの町に育つ…　川鍋正武」等の町内育友会の活動の様子。

「学校だより」として「遠足の副食代制限」がこの頃始められたこと。

「ベレー帽」を鼓笛隊が着用するようになったこと。

第六号には珍らしい「女性豆剣士　気炎を吐く…　三小第一回武道大会」の様子と成績。これは四十一年七月に剣道・柔道部が三十～五十名で発足。毎週二回の練習を積んでの試合とのこと。四年生の女子二名を含む剣道部だったそうです。

第七号（四十二年九月）この頃から[illegible]技大会が、パート別優勝となって来たようです少年ソフトボール大会でも、川尻チーム準優勝で市長杯、個人賞として殊勲選手賞を岩永幸夫君がもらったことも記してあります。

四十二年十二月号になりますと、小体連の「新記録3、タイ記録1」の見出しで当時三小のスポーツ盛んなりの感充分です。

「ベルマークを集めましょう」は各号によく見られる記事です。「お金の心配をしないで、わたしたちの学校がよくなり僻地の学校をも援助出来る」方法「一本が十本に。十本が百本に。百本が千本にふえて行く」という歌のように、私共会員一人一人のささやかな善意が、やがて千点となり万点となり、三小の子どもの幸せにつながる」という元副会長加藤和子さんの文を十号に見ます。

第二十一号（四十六年三月）「ぼくとわたしが選んだ職業」という調査結果は、三小独特のものが現われていて面白いものです。近日中にこれを基にして私共の方で、現在の子

供の様子を調査し、当時と比較してみたいと思っております。

四十六年頃からは、ますます交通事情もきびしくなり、交通部の活躍も盛んで、四十六年二月には、警察署長の表彰も受けています。

毎年の秋の運動会、我が子の競技も見れず、当日の交通整理に励んで下さるお父さん、お母さん方の写真が目をひきます。

四十七年七月の号には、元校長村田先生の「見る目、気づく心」　現在の社会に足りない言葉でしょう。「目の見える人になろう」「気がつく人になろう」先生のお人柄が偲ばれる言葉と思います。

また、この号には、元育友会長山本鳶五郎氏の「新しい酒は新しい皮袋へ」…PTAの新しい活動方向とそれに対応した会則の改正を…と題して、PTA活動に関心と理解を深め、意見を出してほしいと、会員への呼びかけがあります。

「障害児となった我が子に思いをこめて」津町池永英子さん。突然の事故で右手の指をなくしてしまわれたお嬢さんへ、切々と母親の思いを綴ってある文章は胸が痛みます。

三十七号、この号は「がんば」誕生十年で特別記念号となっております。四十八年十二月三十九号では、このころあの突如として襲った石油ショック。当時の教頭園田先生の「炉辺に想う」の中には、今と昔の衣・食・住の違いを「いろり」を中心として、しみじみと語る様に綴ってあります。「現代の生活の中には、すでに「いろり」は消えてしまったが、だんだん石油がなくなってくると、また「いろり火」が必要となるかも知れない。移り行く時の流れに、しばしたたずみ往時を想い、いつまでも心の「いろり火」を、もやし続けていきたいものだ…。」と。

四十号（四十九年三月）石油ショックであわてた大人達。子どもはどうだったでしょう。

「学級担任のぼやき」…木下利之先生「三角定規25組、分度器17個、コンパス12個、直定規28本、鉛筆が色とりどりに87本、消しゴム大小34個、これは、おととし四月からきょうまでの教室内での落し物である。もちろん、そのつど持ち主を確かめて引き取られた残りである。」今の教室もこれと同じような光景でしょう。

「先生、うちわね。お母さんの高こうなる前にたくさん買い占めらしたけんよかとよ…」と「物を大事にしろ」という先生に返されて来た、一児童の言葉だそうです。「道徳的にも考えさせられるのでは」と結んであります。

五十年九月、現代社会で重視されて来た情緒障害児のために、市内で只一学級、三小に開設されたこの教室は、その後順調に歩みを続けております。この年三月三十一日付で、二十二年間三小の用務員として務めて来られた藤田主馬男氏のご退の記事があります。会員の中には幼き日、お世話になった思い出をお持ちの方も、沢山いらっしゃった事でしょう。この号には、もう一つ、久方振りに三小に、若々しい男先生出現の記事があります。吉岡先生の希望に満ちた抱負が書き綴られています。

あれから三年目ー先生いかがですか。御感想は？

会員へ「がんば」に対してのアンケートをはじめて実施。結果を参考に、その後一つの大きなテーマを持ち、これにもとづいて、特集を組むようになっております。五十一年三月、待ち望んだ三小体育館が完成。他の学校より「ちょっと大き目」の立派な体育館完成と並行して、輝かしい三小創立百周年記念の行事が盛り沢山行なわれました。

五十一年には三小育友会は、日本PTA全国協議会総会で大臣表彰。九州地区PTA研究大会にては、優良PTAとして団体表彰と、次々に輝かしい賞を受けています。

この素晴らしい三小育友会の専門部の一端を荷なう広報部の役割の大きさを、改めて痛感しております。

その他にも、巡回文庫、保健室便り、辞書引き大会、新入卒業生の親のことば、各専門部の活動状況、新しい先生方の御紹介、研修旅行感想、県P大会報告、修学旅行、読書感想文・画入選作品の発表球技大会結果等々は、いつの時代にも同じように取り上げてありますが、これについては別に述べませんでした。

ざっと五十号までを振り返てみましたが、いかがでしたか。諸先輩方によって受け継がれたこの「がんば」、今後もますます立派な広報紙として育っていきますよう、会員の皆様と共に頑りたいと思います。

特集号の発刊にあたって

島三小教頭　本多末勝

本年度「がんば」の発行部数が五十号を数え、記念特集号が計画されましたが、育友会の歩みを振りかえって、よくここまで続けられたものだと、代々の多くの広報担当の方々のご努力に頭の下がる思いがいたします。年三回の発行としますと十七年間の長きに亘って続いたことになります。

育友会の活動も学校教育の変遷、社会情勢の変化等に伴ってその活動内容はその時々に対応して変化していると思いますが、「がんば」はその育友会活動の長い歴史を綴っているのではないでしょうか。

もともと会報のねらいは、育友会の目的にそって、子どもの健全な育成をはかることにあると考えますが、そのための広報活動として、

一　学校教育や家庭教育の理解を深める。

二　育友会員としての教養を高める。

三　子どもの安全指導や生活指導に努める。

四　会員相互の親睦をはかる。

五　育友会の活動内容や学校行事等の紹介。

等を中心として、極めて巾広い分野にわたって広報活動が行われ、その果たす役割は極めて大きなものがあると思います。

ここ数年の育友会の動きから考えますと、島三小創立百周年記念事業や体育館建設等大事業が続き、育友会は数か年の継続的な活動によって、その事業の推進にあたられましたがそれらの関連記事は会員全員の手もとに届き、事業の推移を伝え、事業に対する協力の原動力になったかと思います。

又会報発行[illegible]日まで続きただ続いたということでなく、その内容が充実し、編集等も工夫されて今日に至ったことは、ひとえに代々の広報担当の方々の熱意と努力の賜であり、これに対する多くの会員の協力の賜であるといえましょう。会報発行に当って、その取材活動と編集等の問題は、最も労力を要し担当の方々の悩みであったろうと思いますが、困難を越えて根気強く努力されてきたことは毎号発行の紙面の中に脈々と流れています。

今後の最も大きな課題は、この流れを後代に引き継ぎ、いついつまでも絶やさぬことであり、これは現在の広報担当の方々の責務ではないでしょうか。又丁度五十号の節目に当って、初心に帰り反省の時期でもあります。今後技術的な問題のみでなく、経済的な問題等も予想され、新しい障害も生まれると考えられますが、ますます担当の方々のご精進を願い、敬意を表しまして筆をおきます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

七月、お手もとに届いております「がんば」五十号を発行しまして、これは記念すべき号であったのにと思ったのは、後のまつりでした。

先輩から受けつがれて来ました此の歴史を、何とか一つの区切りでもって、形をつけようと、先日、元会長山本鳳五郎氏をはじめ、会長その他各方面の方々と話し合いまして、このように〝特集号〟を作ってみました。大先輩の方々には御多忙の中、ころよく原稿をおひき受け下さり、おかげ様でこのような記念号を発行出来るに到りましたこと、部員一同心より感謝申し上げます。

田口様より貴重なる「がんば」第一号より十三号まで御寄贈いただきまして、本当にありがとうございました。大切に保[illegible]せていただきます。

また印刷所「つるかわ」様には、毎度少ない予算で無理ばかり申しますのに、善意に満ちたご協力をいただき感謝で一杯です。

昨年この部も、初の女性部長誕生で、以前の男性多数部でなくなり、現在では、部担当の小峰先生が只一人の男性、部員は全て女性という構成となっております。

女三人寄れば何とやら…と申しますが、「三人寄れば」も、もう一つの方へ意味を解していただけるように皆で力を合わせて「がんば」の味をよくし、大きく発展して行くよう頑張りたいと思います。

どうぞ皆様の御声援をお願いします。

広報部担当

小峰忠与士先生

部員　有馬隆子
〃　田浦エイ子
〃　森ルリ子
〃　山口ヤス子
〃　斉藤明子
〃　大野和美